

『日本人の行く末が案じられる』

世界の中で日本ほど治安のよい国はないと言われている。日本人が外国へ旅行する際に現地へ行ってからの諸注意がいろいろとあるそうだ。例えば、バッグなどの持ち方では、できるだけ体の前で抱え込むように持ったほうがよいとか、肩掛けのバッグはひったくりの格好の標的になるなど。特に日本人は危機感が薄いのか狙われやすいとのこと。空港や駅など人ごみの多いところではスリの被害が多いという。日本でもそのような心配が全くないわけではないが、外国の治安の悪さはその比ではないようだ。

日本で大震災が起こったときに、諸外国に取り上げられることとして、壊れた大型ショッピングモールなどに物を盗みに入る人間が少ないことが報道される。外国で大地震が起こったときなど、軍隊が出動して暴徒化した泥棒を取り締まっているニュースを見ることがよくある。諸外国の人たちは、そのようなことがあまり起こらない日本という国が極めて稀であると考えているようだ。

ついこの前開催されたサッカーのワールドカップブラジル大会においても、現地まで応援に出掛けた日本人が、試合終了後、席を立ち去る前にゴミ拾いをしていたことを世界中のニュースが取り上げていた。「サッカーは負けたが、マナーは勝った」などと日本を称賛した報道もあった。

日本人旅行者を受け入れる諸外国の人たちは日本人を高く評価している。例えばレオナルド・ダ・ヴィンチの絵画を見る際に、世界中の観光客が大勢集まり、あまりにも混雑している場合、美術館の係員が、並ぶことと見る時間の制限を指示するそうだが、日本人観光客はきちんと指示に従い実にマナーがよいという。それに比べ、ある大国からやってくる観光客なんかは、いうことはきかないし、自分さえよければという言動がやたら多くてしかも行儀が悪く、日本人とは月とスッポンの違いだという。

このようなことから、日本人を尊敬している、よさを見習いたいという外国人は少なくない。また、世界の国で行ってみたい国は？と問われて、是非日本に行ってみたいと答える外国人が非常に多いそうだ。礼儀正しく、約束やきまりをよく守り、相手の立場を尊重する日本人が存在する日本の国が、世界の人々から羨望のまなざしで見られ、素晴らしいと誉め称えられることはうれしい限りである。

日本人の相手の立場を尊重し、自らを優先させないという行動様式、公共心・公德心の備わった振舞など、非常に優れた道徳的実践力を日本人が身につけてきた経緯については、

古くからの日本の伝統や文化の継承、教育が行き届いていたことが挙げられる。

「日本人は他人からの評価を気にし過ぎ」と一部の外国人からの批判がある。昔から悪事をしたり、世間から非難を受けるような行いは、その家の恥であり、親族一同も非難の対象になるという教えが日本では特に根強かった。したがって、常に世間の目を気にしたり、巷の噂話には敏感にならざるを得なかったのではないだろうか。常に世間体や体裁を気にしながらの生活には窮屈な思いもあっただろうが、世間全体がそれを当たり前としていて、礼儀や言葉づかい、人との接し方など厳しく教え込まれる、そんなことが伝統的に続いたのだろう。

さて、世界の国々から高く評価されている日本人であるが、今後も長きにわたってよい評価を受け続けることができるのだろうか。

このことについては、現代の日本人の状況から鑑みると大いに心配な面がある。

近年、日本人の若者に見られる問題点として、対人関係能力の未熟さ、コミュニケーション能力の不足、規範意識の欠如、集団不適應といった社会性の欠如が目立つことが指摘される。それは私生活化へと傾斜していく社会の変化が背景にあると言われている。

少子高齢化、核家族化などによる家庭のあり方、地域社会の中の一員であるという意識の持ち方などが大きく変化してきている。日本人のライフスタイルそのものが、「個」を優先し、「公」に対する意識が希薄化傾向にある。様々な情報及びマスメディアから個人的な興味・関心あることのみを見い出し、それに没頭することが生活の中心となってきている。欲求を満たすためには特に人と接することの必要性など持たない。家庭においては、子どもを厳しく指導する権威ある親よりも「友だちのような親」「子どもの自由を尊重する理解ある親」が増えつつあり、過保護的な環境の中子どもは欲求を抑えることや自分をコントロールすることが少なく、何でも思い通りになるのだと思い込む。こうして子どもは自己愛的な感覚を助長し、自分のことしか考えず、自分のことにしか関心がなく、他の人のことには何の関心も持たないようになる。このように私生活化が進行していくと、子どもは自己愛的になっていくし、自己本位的になっていく。そして、自分の欠点や弱点をありのまま素直に認めることができず、意見を異にする人との関係を築きにくい。そうなれば対人関係能力を培っていくことはできない。という悪循環が年々深化しているのだという。

人のことなどどうでもいい、自分さえよければ、自分が一番大事などという日本人が増え続けていったらどうなることだろう。

日本人が古来から備え持っていた「健気な律儀さ、控え目な奥ゆかしさ」はどこにいったのかということになりかねない。

教育の仕事に携わる者として、楽観視できない日本人の行く末を考えたとき、何とかせねばならんというあせりは強い。